

筑紫（九州）万葉集と風景画シリーズ（第九回）

しの
「妻を偲ぶ歌」

大伴旅人が大宰帥だざいそち（大宰府の長官）として九州大宰府の地に赴任したのは、おおむね神龜四年（七二七）末から翌五年（七二八）の春頃までの間ではなかったかと推定されている。旅人が九州に赴任してまもなく、連れ添ってきた愛妻おおくさめのちづつめ大伴郎女がこの世を去ってしまう。そして追い打ちをかけるように親類の訃報が届いた。

題詞に「大宰帥大伴卿の凶問きょうもんに報こたふる歌一首」（神龜五年〈七二八〉六月二十三日）として次の歌が載せられている。

むな

1) 世の中は 空しきものと 知る時

しいよいよますます 悲しかり

けり

卷五―七九三 大伴旅人

（解説）世の中は空しきものだとつくづく知る時に、しいよいよますます悲しみがこみあげてくることよ。と断腸の思いを歌に託している。

・不幸が続き亡くなった人のことが何かにつけて思い出され、一人悲しみに沈み、断腸の涙を流していると記述されているが、愛する人、身近な人を亡くしたものの心情は現代人と少しも変わることはない。

・大伴旅人は妻を失ってからというもの、寂しい歌が多いのだがその内の一つに「酒を讚むる歌（讚酒歌）」の連作がある。

旅人は妻に先立たれた寂しさ、孤独や老いの虚しさなどを酒に託したように、杯を傾けながら詠んだのではないかと見られる次の一首が「讚酒歌」にある。

しるし

2) 駿なき 物を思はずは 一杯の

ひとつき

に

濁れる酒を 飲むべくあるらし

卷三―三三八 作者 大伴旅人

（解説）くよくよしてもはじまらない物思いなどにふけるよりは

一杯の濁り酒を飲むほうがよさそうだ。

・瀬古確「大宰府圏の歌」は「世の中の空しき事を知ると共に、酒を讚むる歌も生まれたのであり、これらの歌にも作者の亡妻への思慕の念を認めずにはおられないのである。」と述べている。

・妻と死別し、悲嘆と絶望のさなか、その思いを酒に紛らわそうとした旅人の心が垣間見えるような歌である。旅人の讃酒歌の成立時期は天平元年（七二九）に入つての詠であるとする説がある。

・大宰府帥・大伴旅人邸が当時どこにあったかは不明だが、大宰府政庁跡のすぐ北西、今の四王寺山南麓にある坂本八幡宮付近から南に続く蔵司くらじ（綿・絹など調庸〈租税〉物の収納・管理場所）跡の台地にかけての傾斜地一帯は小字内裏だいりとよばれ、愛妻大伴郎女と過ごした官邸はこのあたりではなかったかとの説が多い。

・「大宰府政庁跡」 Ⅱ大伴旅人が大宰府帥として赴任した大宰府は奈良・平安時代を通して、九国三島（現・九州と杵岐・対馬・種子島）を統治し、我が国の外交・貿易の窓口であり、かつ西の防衛の任に当たった地方最大の役所であった。

大宰府政庁跡へは公共機関を利用していくには「西鉄天神大牟田線・都府楼前」で下車、沿線に大宰府政庁跡、観世音寺、太宰府天満宮、九州国立博物館などがある筑紫野太宰府線（福岡県道76号線）を東へ約15分歩くと北（左）側に奈良（平城京）、京都（平安京）に次ぐ役所「大宰府政庁跡」に着く。現在、政庁跡は公園に整備され、市民などの憩いの場となっている。

筑前の国守・山上憶良が大宰府で大伴旅人が妻を亡くした時、その死を痛んで神亀五年（七二八）七月二十一日に旅人に贈った挽歌（長歌一、短歌五）に次の短歌二首がある。連れ合いを亡くした旅人自身の寂しさと無念さを代弁し詠われている。

3) 家に行きて 如何にか 吾がせむ 枕

つまや

づく 妻屋さぶしく 思ほゆべしも

卷五―七九五 作者 山上憶良

（解説）家に行ったところで、私は何としよう。枕を並べてある妻屋も、きつとも寂しく思われることであろう。

くや

4) 悔しかも かく知らませば

あおに

くぬち

青丹よし 国内ごとごと 見せましも

巻五―七九七 作者 山上憶良

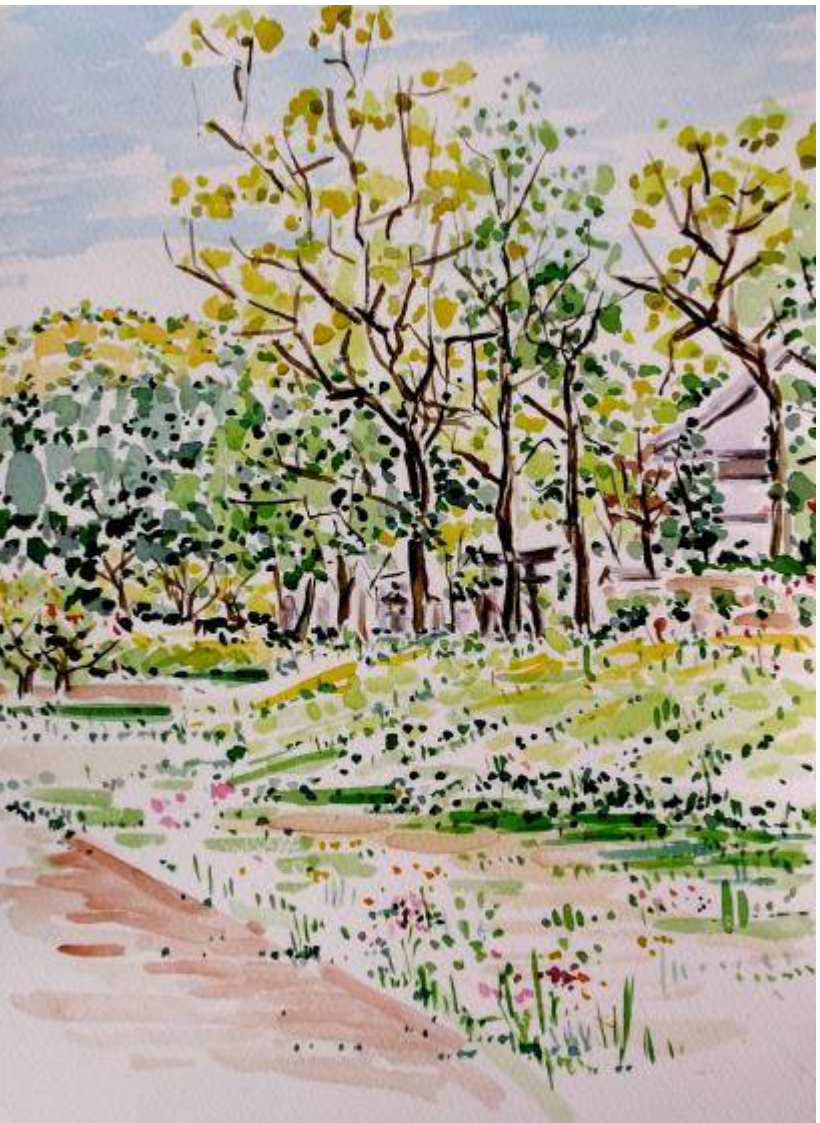
（解説）まことに残念です、こういうことになるのが分かっておれ

ば筑紫の国中を連れて歩き隅から隅までごとごとく見せてやればよ

かった。

「写生地」

大宰帥大伴旅人と妻大伴郎女の住んでいた官邸跡の一つに推定されている政庁跡の北西にある坂本八幡宮付近から蔵司跡の台地にかけての傾斜地一帯の地を描く。(池田杏花)



5) 大野山 霧立ち渡る 我がなげく おきその風に 霧立ち渡る

巻五―七九九 作者 山上憶良

(解説) 大野山いっぱい霧が立ちこめております。これは私の悲しみのため息で、あたり一面にこのように霧が込めているのです。

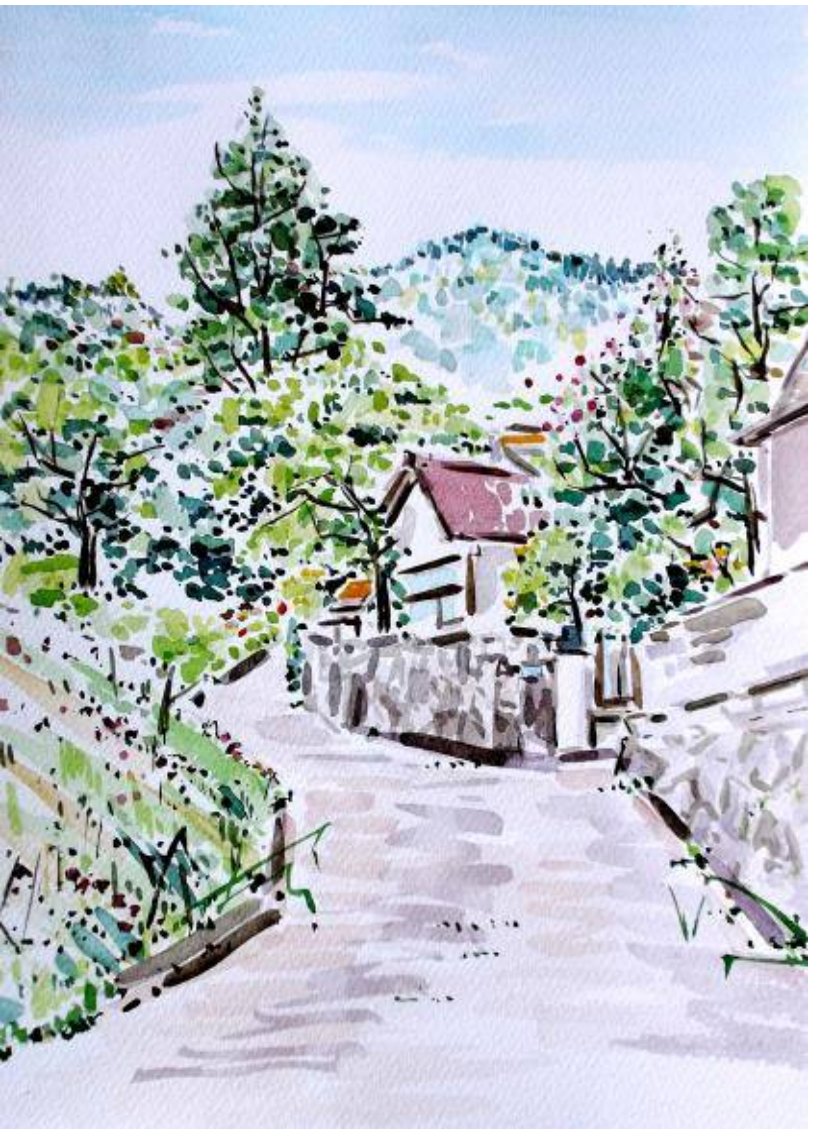
(写生地) 大宰府政庁跡北西にある坂本八幡宮前の道から水田や畑が点在する坂本(太宰府市)の集落を経て大野山(現四王寺山)に登る山道がある。この山道は大宰府政庁(都府楼)跡の背後(北)に東西につらなる大野山(現・四王寺山)の頂(標高四一〇m)へ登るいくつかの道のうち大宰府政庁(都府楼)から一番近くの登り道である。四王寺山は万葉集では「大野山」「大城の山」と詠まれている。

・四王寺山について「万葉の旅・犬養孝著」には「いま四王寺山というのは宝亀五年(七七四)新羅の凶心をはらう祈りの四王像がまつられた址があるからだ。白村江大敗後の天智四年(六六五)、南方の基山とともにここに百済の亡命技術者によって朝鮮式の山城がつくられた。山上の四周五二〇〇メートルにわたって土塁石塁でかこみ、有事の際は籠城できるようにしたもので、その遺址は山上各処にある。

「当時大宰府の官人らによって朝夕に親しまれた山だ」と述べている。

回坂本集落から北に聳える大野山（現・四王寺山）と大野山の頂に

至る登り道などの風景を描く。（杏花）



（参考文献）犬養孝「万葉の旅」・前田淑「大宰府万葉の世界」・滝口弘「九州の万葉」他